



名作にふれる

校長 大島 進

10月は、長く続いた夏の気配が薄れ、季節が進んだことを知らせてくれる時期です。活動しやすいこの時期には様々な代名詞があげられます。学問の秋、食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋、芸術の秋……。

今回、詩に特段の興味があるわけではありませんが、前から気になっていた詩について調べてみました。

「ふるさととは遠きにありて思ふもの そして悲しくうたうふもの」

この言葉は室生犀星の「小景異情」という6つの詩で構成されている作品の2番目の詩の冒頭部分です。

ご存じの通りこの詩は、ふるさとへの思い（郷愁）をうたった詩ですが、ふるさとの金沢へ帰りたいということではなく、貧しくとも東京で頑張る決意をうたった詩といわれています。

複雑な環境で育ったふるさととは、帰郷しても疎外感を感じてしまう場所だった室生犀星の心情を表していて、多くの人々に切なさを感じさせる作品と言えるでしょうか。

「あることから離れてみて または失ってみて こみ上げてくる思いがあり（失ったことに対して）大切に気がつき 新たな覚悟を持って生きていく」という多くの人が一度は経験する情景を思い浮かべてしまいます。

自分のような平凡な人間は、これまで歩んできた人生で幾度となく「失って気がつく」「離れてみて気がつく」ことがありましたが、そのたびに悔いが生じます。一方、室生犀星の「小景異情」の詩に自分を重ねることで実際に失わずとも家族の大切さであったり、ふるさとの大切さであったり、友人の大切さに気がつくことができます。

これまで長きにわたって残された名作には、時代の流行に左右されずに脈々と受け継がれ、実際に私たちが体験していないことを教えてくれることがあります。（もちろん比較的新しい作品も多くのことが得られると思います。）

秋という季節は何をするにも良い時期ですが、それは気候だけではなく、4月から新たなスタートラインに立った多くの人にとって半年が経ち、生活のペースがつかめてきたタイミングとして何か新しいことに取り組むことに良い時期でもあります。今回は「名作の秋」として巻頭言を進めましたが、何か新しいことを始めて見ると自分自身の新しい発見につながるかもしれません。

吹上中学校は、毎日の日課に「朝読書の時間」があり、本に親しむ時間がありますが、改めてじっくりと長い時間、読書をして、その時感じたことをゆっくりと考えてみる機会を設けてみてはいかがでしょうか。

